京都工芸繊維大学

氏　　名	やべ　ひとみ **矢部　仁見**
学位(専攻分野)	博　士（学術）
学位記番号	博甲第　791　号
学位授与の日付	平成 28 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻	工芸科学研究科　造形科学専攻
学位論文題目	**ジョージ・ネルソンの作品に見るミッドセンチュリー・モダンスタイルとその変容について**
審査委員	(主査)教授　櫛　勝彦 教授　中野仁人 教授　並木誠士 教授　野口企由

論文内容の要旨

本論文は、1945 年から 1970 年代までのジョージ・ネルソンの家具デザインと著述を事例に、ネルソンのミッドセンチュリー・モダンが持つ意味と、それを起点としたその後のデザインの変容を再評価しようとするものである。

第 1 章では、インダストリアル・デザイナー第一世代に始まるアメリカ独自のデザイン界の背景を確認した上で、第二世代といわれるネルソンが他のデザイナーと異なる俯瞰的視点を持っていたことを明らかにし、彼のデザインの変容を検討する意義を論じる。

第 2 章では、1945 年から 1950 年代のネルソンのミッドセンチュリー・モダンとされる作品群が、自国アメリカのデザイン確立のための表現であったと考えられることについて論じる。その背景としてこの時代のネルソンのデザイン観に、自国の誇りとヨーロッパへの劣等感、美術とデザインの近似視及び、それらに関連するフランク・ロイド・ライトへの傾倒があったことを彼の論説から考察する。アメリカを象徴する新技術や新材料で実現されるデザインではなく、ヨーロッパとの壁を越えた普遍性が、ネルソンにとって次なるアメリカのデザインのあり方を示すものであったいえる。そして彼の表現は、実はアメリカの第二次世界大戦後の陽気なアメリカン・ライフを企図したものとはならず、当時の大衆社会において真の理解を得ることは無ないまま、1960 年代以降、主軸をオフィス家具に移したことを指摘する。

第 3 章では、1960 年代のネルソンの家具デザインを代表し、一定の評価が存在するオフィス家具、「アクション・オフィス 1」に焦点をあて、彼の新たな意欲とデザイン思想の変容を分析する。そこにはキュビスム的と受け止められる手法や、断片化された脚部の美的なデザインが発見される。中でも脚部に顕著である美的なデザインの過剰さをある種の修辞として受け止め、これをネルソンのデザインにおける美的パラダイムの転換と考え、そこに新しい視点の萌芽を見出す。同時にネルソンの論説の分析から、この視点にはいかに秩序と調和を創り出すことができるかという、空間と関連する新しいデザイン思想への示唆が含まれていることを発見する。

第 4 章では、彼が家具デザインの集大成と位置づける 1970 年代のオフィス家具、「ネルソン・ワークスペース」に焦点をあて、それがこれまでのデザインに存在した表現とは別のデザインへと変容したことの意味を論じる。作品の具体的な分析からは、ネルソンが美観的形態追求を脱し

人間を起点とする場の創出のためのデザインへ移行していったことを指摘し、さらにその背景にあるデザイン思想の変容の在処については、同時代のネルソンの著作を検討し、「場」の創出が「ネルソン・ワークスペース」のデザインの企図となっていることを明確にする。また、美の創造のみがデザインの目的ではないという思想とデザインプロセスの重要視も明らかにする。そしてそれらは自らのミッドセンチュリー・モダンとされるデザインへのアンチ・テーゼを包括するネルソンのデザインの進化であると結論する。

以上のように、ネルソンのミッドセンチュリー・モダンとされる家具類を起点とするデザインの変容には、美的な形態表現が意図されたモノのデザインから豊かな人間環境創出のための装置としてのデザインへの止揚が、時代や社会とともにあったことを見ることができる。この発見とネルソンへの新たな評価が、この研究の最も重要な意義である。

論文審査の結果の要旨

本論文は、ジョージ・ネルソンのミッドセンチュリー・モダンとその後のデザインの変容を新たな視座から明らかにした点において、先行研究とは一線を画する独自性を持っている。

ネルソンが戦後の激動のデザイン界でいかに悩み、それがどのように作品や言動、教育に反映されていったのか。これは、一般的に理解されているミッドセンチュリー・モダンの作品例の分析だけでは語ることができないこと、また、ミッドセンチュリー・モダンを含みながらさらに未来のデザインを模索、提案する領域にネルソンが踏み込んでいたことが、この研究で新たに明らかになったといえる。

また、申請者が、ネルソンの作品群だけではなく、彼の論説や言動、教育活動にも焦点をあて、作品の裏側にある思想的な背景を探り、分析することに意欲的に取り組んだことは非常に価値がある。

まず第１章で、インダストリアル・デザイナー第二世代におけるネルソンの広い視野とデザインに対する新たな俯瞰的姿勢の萌芽が、1920～1940 年代の第一世代がもたらした表層的デザインの陳腐化への対抗であることを分析している。このことが彼の著述や先進的教育活動に現れている事実を詳しく紹介し、論理的に証明している点は非常に説得力があり、当時のアメリカの時代背景とネルソンのデザイン活動が結びついていることが分かる。

次の第２章では、1945～1950 年代におけるネルソンの作品や言説を詳細に分析すると同時に、同時代の他のデザイナーによるミッドセンチュリー・モダンとされる作品との比較をおこなっている。さらに、ネルソンのミッドセンチュリー・モダンとされない家具類の分析まで加えることで、彼の目指したデザイン観を多角的に分析した点は極めて新しい試みである。つまり、ネルソンのミッドセンンチュリー・モダンには修辞的なスタイルとストイックなスタイルが同時に存在し、対比的な二面性を包括する力があることを強調している。ここに常に俯瞰的な視点で社会とデザインのあり方を思考していたネルソンの独自性を発見したことは極めて意義がある。

第３章では、1960 年代の作品に見るさらなる新しい変遷を追っている。それは、ネルソンの家具デザイン活動の主軸が家庭向け家具から独特なオフィス家具へと移行していった事実とその背景の分析である。具体的には「アクション・オフィス１」というオフィス家具シリーズとその周辺を取りあげている。ハーマンミラー社との密接な関係、リサーチ部門の設立と概念的な空間への新しい視点の萌芽、オフィスランドスケープという概念の出現、空間の秩序と調和を形成する

ためのデザインという思想、そして、画家ジャクソン・ポロックの絵画に抽象化されたカオスとオーダーの構造を家具デザインに昇華するというアイデアに至るまで、ネルソンの論説等から詳しく分析し、これらの取り組みが過渡期的なアメリカン・モダン・デザインへの表出意欲であったことを明らかにした点は興味深い。

最後の第４章では、1970 年代ネルソンの作品が大きく減少する中、「ネルソン・ワークスペース」をこの時代に出版された著作とともに分析している。これはネルソンのデザインに見られた大きな変容と意味を知る上で極めて意義があるものである。1960 年代の代表的デザインに見られた概念的空間への視点がここに現実の空間で人との関連を持つ「場の創出」としてのデザインになったことを、作品分析と言説から明らかにしている。オフィス家具という領域から進化し、人を包含する装置としての環境を創造し、進行する状況の中で価値を持たせることが企図されていることを明らかにした点は高く評価できる。

以上のように、申請者、矢部仁見は、ジョージ・ネルソンのミッドセンチュリー・モダンとされるデザインの中に美観的な形態表現が意図されたモノのデザインから、豊かな人間環境創出のための装置としてのデザインへの止揚があったことを詳細な分析から明らかにした。これは、ジョージ・ネルソンについてこれまでにない評価軸を設定し、検証した点で大いに独創性があり、また信憑性も高く、学位論文として充分な価値を発見できるものと考える。

また、本論文の基礎となった研究内容の一部は、申請者による次に示す 2 編の査読付き学術論文として、すでに公表、また掲載予定されている。

（学術論文）

1）矢部仁見

：「ジョージ･ネルソンのオフィス家具デザインにおける特性と変容―新しい空間への視点とデザイン―」、意匠学会『デザイン理論』第 65 号、pp.59-72、2014

2）矢部仁見

：「ジョージ･ネルソンのミッドセンチュリー・モダン－1945 年から 1950 年代におけるデザインの特有性－ 」、意匠学会『デザイン理論』第 67 号、2016 に掲載予定